

中国東南部における回族の文化変容と祖先崇拜： 福建省南部回族村落における現地調査を中心にして

著者	潘 宏立
著者所属(日)	平安女学院大学人間社会学部国際コミュニケーション学科
雑誌名	平安女学院大学研究年報
巻	6
ページ	59-72
発行年	2006-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00001236/

中国東南部における回族の文化変容と祖先崇拜

— 福建省南部回族村落における現地調査を中心にして —

潘 宏 立

漢民族が集中している中国東南部に、唐から宋にかけて「海路」で入ってきたアラブ・ペルシア系の商人を祖先とする回(ホイ)族が点在している。こうした回族は「陸路」から入ってきた西北内陸部の回族と異なり、周囲の漢族が圧倒的に多いため、漢族との文化的接触が古くから行われ、文化融合の程度が高い。中国東南部福建省南部の回族村落は、規模が大きく人口も多い¹⁾。しかも民族意識が強い。それにもかかわらずイスラム教の信仰をほとんど失っている。1980年代から漢文化の影響を受けた祖先祭祀が盛大に行われるようになり、イスラム伝統への「記憶」がよみがえり、民族文化を復興しようとする動きも見られる。筆者は2002年から2004年までの3年間にわたって、福建省を中心に、江蘇省、浙江省、広東省、海南省の回族社会を調査し、各地の基本状況を把握した²⁾。本文では、主に現地調査の資料に基づいて、福建省南部の回族村落における中国東南部の回族歴史、文化変容の原因と過程、民族文化復興の現状を明らかにしたい³⁾。

1 福建省南部回族の歴史について

中国東南沿海部に位置する広東省、福建省、浙江省といった広い地域においては、巨大回族村落は福建省にしか存在していない。そうした村落は、福建省南部沿海地域泉州湾にある晋江市陳埭鎮と惠安県百崎回族郷にある(写真1)。晋江市陳埭鎮の中心部に位置する7つの行政村は共通の祖先を持つ丁氏回族の村落群である。それは江頭、岸兜、溪辺、西坂、鵬頭、四境、花庁口であり、人口総数22000人を超えている。惠安県南部に位置する百崎回族郷は5つの行政村を持ち、それは白奇、里春、蓮埭、後海、下埭である。郷人口総数の90%以上は共通の祖先を持つ郭氏回族であり、13000人を超えている⁴⁾。

陳埭丁氏回族と百崎郭氏回族はともに宋元時代に海のシルクロードによって泉州にやってきたアラビア・ペルシア商人の後裔である。泉州は宋元時代において、世界有数の商港として知られ、アラビア・ペルシアをはじめとする世界各地の商人が雲集し、中国の陶磁器やシルク、海外からの香料などの商品が泉州港から輸出入されていた。この海のシルクロードの重要な出発地では、数万のアラビア・ペルシア商人が滞在していたと言われる。当時の泉州において、海外からの商人とともに、各種の宗教も入り込み、今もイスラム教、キリスト教、インド教、マニ教などの遺跡が多く残っている(呉 2004)。現在も重要な社会的な役割を果たしている泉州「清浄寺」(麒麟寺とも呼ばれる)のような巨大モスクは7ヵ所もあった⁵⁾。泉州清浄寺は揚州仙鶴寺(礼拝寺)、杭州鳳凰寺、広州懷聖寺と並び、中国東南沿海四大名寺(モスク)と呼ばれている。

元の時代、支配者はこうしたアラビア・ペルシアからやってきた「蕃客」を優遇し、「色目人」と称し、支配民族である蒙古人に次いで二番目に高い社会的地位を与えた。当時の泉州においては、海外貿易は空前の繁盛を謳歌し、イスラム教が急速に発展を遂げていた。ムスリムは強い経済力を持ち、政治中枢にも深く入っている。泉州の政治、軍事、経済の支配権は事実上、政権に入ったムスリムの官僚に握られていた。例えば、元代初期の蒲寿庚およびその子孫、元代末期に市舶提挙を勤めた那兀納、義兵万戸の賽甫丁、阿迷里丁は、各自の武装組織を擁している。今まで、考古学者は泉州でアラビア、ペルシア文字のモスクの建築石刻、墓碑、石墓蓋を500余発掘し、ムスリムの墓地20数ヵ所

を発見している。ある墓地で約千基のムスリムの墓が存在している。こうした考古学の調査でも、当時ムスリム人口の多さと勢力の強さを推察できる。ムスリム勢力の膨張により、漢民族のイスラム教の帰依者が多く見られた。『栄山李氏族譜』(垂戒論)は、「色目人来捩閩者、惟我泉州為最識。……然其間有真色目人者、有偽色目人者、有從妻為色目人者、有從母為色目人者」と記し、当時、漢族のイスラム教帰依者の続出を示している。



写真1 恵安県百崎回族郷政府のイスラム風格のオフィスビル

ところが、元末の戦乱や、明初の排外的風潮と「閉鎖鎖国」政策などの影響によって、泉州のムスリムは商業を棄てて山間部や沿海部の僻地に逃れ、亡命生活を送ることを余儀なくされるようになった。元末明初、泉州では漢民族は、かつての異民族の支配者に対する民族復讐を激しくするようになった。漢族出身の権力者は政権交替の混乱を利用して、アラビア・ペルシア系の官僚を倒したと同時に、多くの無辜のムスリムをも殺害した。泉州城内のムスリムは、「凡西域人尽殲之、胡髮高鼻有悟(誤)殺者。閉門行誅三天」(『清源金氏族譜』)と記されたように残酷な虐殺に遭った。このため、この時期では、多くのムスリムの墓地やモスクが破壊され、燃やされた。泉州のムスリム社会およびイスラム教は壊滅的打撃を受けた。こうした過酷な社会環境において、亡命したムスリムは長期間、自分たちのステータスと由来を隠蔽しなければならなかった。陳埭丁氏と白崎郭氏回族の始祖も、泉州から沿海の僻地に逃れ、漢族と共同の生業活動をするようになった時に、自らの文化の外面的要素を抑えて、最大限に漢族の伝統観念や習俗と調和適応をしなければならなかった。したがって、自文化要素の中のイスラム的要素を徐々に失い、地元の漢族文化に近づくことになってきたのである。

2 福建省南部回族の文化変容

泉州回族文化は元末明初から衰弱の途を辿っている。陳埭丁氏の場合、祖先は泉州市内を離れ、商売をやめ、泉州南にある陳江(現在の陳埭地域)で農業に従事するようになった。身の安全および一族生存と発展のため、やむを得ずイスラム文化を隠したり放棄したりした。それと同時に、漢族文化を吸収し、伝統的な価値観を受容したため、漢化の度合いが段々高くなってきた。丁氏回族の祖先は陳埭地域に入ってから、長い間にわたって三つの面で漢族社会に根を張って定着しようとした。まず、

「民族」の身分を隠したままで戸籍に登録した。陳埭丁氏始祖の3人の息子が明政府の政策に従い、正当な名義で陳埭に戸籍を立て、一族の発展の基礎を築いた。次に、政府に協力し、政治に参加し、地方政府からの支持と保護を求めようとした。また、地元の漢族との友好関係を築き、周りの郷民たちの擁護を得て、漢族社会の中に地位を確立したのである(庄 1997: 164-166)。長い間、丁氏回族は自分の回族の身分が煩わしさを招き、一族の生存を脅かされていることを深く実感していた。

明の弘治7(1494)年、七世の祖先は漢族のように族譜の編纂に始めて着手した。「以昭其裔不出于回回也(回回族の後裔ではないことを証明する)」ため、族譜では漢族の同姓である宋代の端明殿学士の丁度を陳埭丁氏一族の祖先として編入し、祀るようにした。さらに、イスラム教に厳禁された豚肉の食用も、明代中期から広がった。イスラム教の習俗と相容れない漢族の生活習慣を受容したことからの文化的衝突を緩和するため、丁一族が豚肉を食べることは「皇帝から賜ったものである」という伝承をもうけるようになった⁶⁾。実際には、豚肉禁食のタブーの打破は、陳埭丁氏回族のイスラム教の衰弱と全面的漢化を象徴するものであった。陳埭丁氏回族は、偶像崇拜を認めないというイスラム教の伝統も完全に失い、周囲の漢族のように仏教や道教などの多くの神を祀るようになった。また、儒教を徹底的に受容し、そのため周辺の漢族と同じような儒教社会になった。「丁氏宗祠」のような祠堂や祖厝を建て、位牌を作り供養し、祖先を敬虔に崇拜するようになった。こうした急速な漢化という現象のため、1980年代までに丁氏回族は社会や文化の面において周辺の漢族と殆ど変わらずに見えるまでになった。例えば、実際には、村人は豚を飼い、豚肉を普通に食べる。さらに、祖厝での祖先祭祀でさえ豚肉を供える。もっとも、かつての一族のムスリムの歴史は「記憶」として残っている。「丁氏宗祠」の回字形の構造を持つことは、子孫たちに丁一族が回族の背景を持っている、ということを示唆する言い伝えがあり⁷⁾、「丁氏宗祠」で祖先を祭祀する際に、豚肉と豚の油を禁止するという風習は残っている。とはいえ、回漢の境界線はわずかしか残っていないようになった。

百崎郭氏回族も似た民族の歴史と文化変容の過程を持つ。族譜によると、百崎郭氏回族の一世祖である郭仲遠は家族を連れ、明の洪武9(1376)年に百崎地域に移住した。郭仲遠の祖父である郭徳広(本名の漢字表記は伊本・庫斯・徳広貢という)は浙江省杭州府富陽県在住の役人であって、「以宣差微禄、奉命来泉、督糶供应」といったように食糧供給のため泉州に来るように命じられた。しかし、「其時干戈擾攘、弗克還朝、遂納室於泉而家焉」と記されているように、戦乱に遭い、帰れなかった。その後、泉州で結婚して、定住するようになった。郭仲遠はアヒルを飼い、風水の良い百崎に住み込んだ⁸⁾。この時、すでに李、陳などの漢族が暮らしていた。つまり、郭一族は移住当初から漢文化により囲まれていたのである。

百崎に移住してから、郭一族はイスラム教信仰を守る決意がありながら、漢文化からの影響をどんどん受け入れて、ついに、約200年後の明万暦時代になると、郭一族はイスラム教を放棄するようになった。『郭氏奇山義房家譜』中の「復遵回回教序」(第八世の郭夢祥執筆)によると、「我祖自開基白奇以来、曾貯天經三十部、創建礼拜寺、尊重經教、認主為本」と記されている(百崎郭氏回族宗譜編委会 2000: 14)。百崎では、前後に三つの清真寺が建てられた。最後の清真寺は清の康熙時代(17世紀後半から18世紀前半)に建てられた。これによると、『コーラン』などのイスラム経典を多く保有し、モスクを建て、真主(アラー)を信じて、礼拜をするというイスラム社会によく見られる風習は存在していたことがわかる。

しかし、明朝初期には、厳しい排外的社会風潮および儒教の民間浸透の現実において、百崎一族は早くも漢族の儒教思想や宗法制度からの影響を受けている。明の時代に入ると、福建省南部において宗族が高度発達してきた。族譜の編纂や祠堂の建設は農村で広がっていた(陳 1991)、(潘 2002)。郭一族も百崎に入植してから、早くも56年目の明の宣徳7(1432)年に初めて祠堂を建てた。この年は百崎始祖である郭仲遠死去のわずか10年目である。郭氏祠堂は二世祖により建てられ、しかも一

般の祠堂より規格の高い「家廟」として建てられた⁹⁾。家廟は「宣尉府」と名付けられ、それは泉州に定住しに来た郭徳広の官職に由来するという。官僚を輩出する一族しか建てられない家廟を建設したことは、まだ人数の少ない郭一族の社会地位の向上には重要な役割を果たしていたと考えられる。この家廟は落成されてから現在までの573年間に清の乾隆と同治の時代に、2回修理された。その後、光緒24(1898)年に焼失した。11年後の清末の宣統元(1909)年、部分的に再建された。ついに民国17(1928)年になってようやく全部が再建された。1992年、老朽化した家廟は改めて再建された。長い間にわたって、郭氏家廟は一族の祖先崇拜の場として宗族の団結を促進してきた。

郭氏族譜の編纂も早かった。百崎に移住してからの60年後の明の正統元(1436)年に、初めて族譜を編纂するようになった。排外的社会風潮において、一族の安全と社会地位向上のため、異民族の身分を意識して隠したことは、初めて編纂された族譜の中にははっきりと見える。それは陳埭丁氏回族のように漢族の著名官僚を自分の遠祖として族譜に編入することである。1436年に書かれた「家譜題辞」の中には、儒教の親孝行の教えを表し、遠祖を追憶するように記されている。「……鴉之反哺、羊之跪乳、是皆知本故也、微物尚然、況人為万物之靈、可不知所本而忘厥祖之由来乎。吁、吾之先、太原人也、始由唐尚父太尉中書令汾陽忠武王。」ここでは、先祖のアラビア・ペルシア出身を隠して、初めて唐尚父太尉中書令汾陽忠武王である郭子儀を百崎郭一族の遠祖として編纂したのである。

前述したように、百崎郭氏一族は早くから家廟の建設や族譜の編纂を完成し、漢族文化からの影響を強く受容した。族譜の記載によると、「伝至八、九世乃出教、諒在万曆年間」(百奇郭氏回族宗譜編委會 2000:15)という。実際には、16世紀後半の明の万曆に入ると、「出教」(イスラム教を放棄する)者が続出することは、百崎のイスラム式墓の中断現象とも一致している。百崎郭一族のイスラム式の墓型は、万曆に入ると突然なくなった(郭 2003:524-525)。明の中期から、百崎郭一族の漢化は急速に進んできた。

ところが、清朝の康熙末に入ると、泉州市内のムスリムの「重興教門」(イスラム教を復興する)動きからの影響を受けて、百崎では部分的イスラム信仰を復興する現象が出てきた。埭上村では新しいモスクさえ建てられた。その後の嘉慶時代において、再編された族譜には、新たに漢文化からの影響を食い止め、回族の伝統を守ろうとする条文が多く盛り込まれていて、宗族エリートの焦慮感をうかがわせる。ここでは、清の嘉慶12(1807)年に追加した関係条文を挙げる。

「開列禁条以訓誥后嗣」とは、郭氏一族に仏教、道教ないし民間宗教に基づいた儀礼や習俗に対する「禁止令」である。その内容は次のようである。

家禁用道釈教。

家禁用功果追薦冥金冥紙冥人及一概紙料。(此乃虚無寂滅之端、何関世道人心之要、如吾宗百奇鋪、自元以来、禁用佛家功果追薦冥金冥紙冥人及一概紙料、悠然合乎誠正之道、即若前有名賢、不用功果諸端、及後嗣變而從俗、反見子孫之消磨殆盡、并亦不知其謬、終於迷惑之途而弗返也、且又不利於吾宗、前代既經驗之、後之子孫、其当知戒、以無忘乎家規、以無忝乎儒道、他若惠安上曾姓某、後嗣用佛家功果、其後果滅亡也。)

家禁用尼姑超渡神者邪説。

家禁用紙料冥銀繳庫。

家禁用神佛医法。

家禁用時俗術家替身過関。

家禁用冥金冥銀於祀畢之候。(此又吾家之所最忌也。)

家禁用火葬瓦葬(即瓦罐也)。

家禁用線戲。(此乃道釈教謝神体系。禁之於今凡五世矣。)

凡近道积邪教、一切摒除。以儒道為崇尚、盖闢虚無而正教、祛邪惑而大道尊。

この「禁止令」では、百崎郭一族の家庭内に広がっていた漢族の影響を強く阻止しようとする思惑がよく見られる。例えば、家庭内の仏教、道教ないし民間信仰の習俗について禁止の内容を明確にしている。祭祀儀礼では、すべての紙銭を禁止している。葬式では、超度儀礼を禁止し、尼僧を排除している。また、民間信仰の方法(例えばシャーマン)での病氣治療を禁止している。火葬や骨壺の使用を禁止している。さらに、神に感謝する人形劇の上演も禁止している。

また、祖先祭祀についての禁止内容も明確に規定した。その詳細は「開列祀先人所不用之品乎(義斎公垂訓)」に明記されている(百奇郭氏回族宗譜編委会 2000:22)。最初には「祀所以報本追遠也、……清真教之祀近之」と述べられていて、漢文化の祖先祭祀の儀礼をイスラム風習に従わせる考えがうかがわせる。ここでは、その内容をいくつか挙げる。

祀預日、必先沐浴。非沐浴、不許与其祀。必潔衣服、非潔衣服、無以昭其敬。

祀預日、必先巡掃其墓。

祀之礼必依品級。

祀禁用鼓樂。

祀用素服。

祀封牲治具、必昉教門。

祀用儒家礼兼之。

祀禁用獸畜而無角者。

祀禁用水族而無鱗者。

祀禁用水族而非卵生者。

祀禁用水族介類。

家禁用豚。

凡祭儀度、必以儒家為崇尚。(此在本族祠中已然也、論曰、讀聖賢書、学聖賢事、不背教亦不泥教。……)

上述した内容を見ると、祭祀の準備段階では、イスラム教礼拝前の「大浄」のように全身を清潔にしなければならない。また、祭儀を行う時、鼓樂を演奏しない。特に供え物は清真の要求に従わなければならない。特定の動物の供えを禁止し、家庭内においても豚肉を禁止することが明記されている。但し、儒教を尊ぶことも書き加えられている。

さらに、一族の葬式の注意事項についても、族譜の「開列喪制宜戒条項」で明記されるようになった(百奇郭氏回族宗譜編委会 2000:23-24)。その主要項目は次のようである。

喪制三年喪、大功小功等殺。

喪葬戒功果追薦繳庫。

喪葬戒糊紙厝及冥金冥紙冥錢冥人冥輜等項。

喪葬戒用鼓樂。

喪葬戒用道积引路。

喪葬戒獻紙錢。

喪葬戒用幢幡護送。

喪葬戒用吉服(藉名吉葬、非礼也)。

喪葬後巡墓戒獻紅白錢。

喪葬後墓而不收、非有甚害、切勿遷掘、以致先人不安。(世俗有一種凶利之輩、嗜好無厭、專惑堪輿、不惟停柩之貽害、或陷於水火、或至家破、暴骨霜露、即安土之後、貧迷富貴、始而遷於一、繼而三四遷、其不孝罪大已極、尚無可逃之。矧欲邀福、其可得乎、戒之。)

喪事戒焚死者病時之食用器具。(若謂可丟、胡不以所寢之床榻并焚之、且亦不仁之心、戒之。)

喪事戒用尼姑等超度。(其不孝之罪、已出先賢論定、戒之。)

喪事戒停柩。(死者須速入土為安。)

喪事戒豎幡打城惡習。

凡近虛無寂滅諸端。非閔世道人心之要。經戒除之、逐一再列、以儆後人、知為無用、後人凜之戒之。

上述した条項を見ると、漢族の葬式にとって重要な内容は、ほとんど禁止されている。葬儀の時、紙銭などの使用や太鼓、楽器の演奏を禁止し、僧侶や道士の役割を排除することになった。また、閩南漢族の葬儀に欠かせない超度儀礼も禁止された。さらに、福建省を含む東南中国に普遍存在している二次葬の風習に対しても、痛烈に批判し、してはならないと明記している。この条項では、イスラム式の葬式に言及していないにもかかわらず、漢族式の葬式における仏教や道教などの宗教的要素と「厚葬」風習を完全に否定している。

清の嘉慶12(1807)年に追加された族譜の内容を分析すると、百崎郭氏は当時、漢化の程度はすでに非常に高いレベルに達していたことがうかがわれる。また、郭氏回族のリーダーは、一族の漢化程度の深さに対して強い危機感を持ち、どうしても歯止めを掛けたかった、ということがわかる。さらに、イスラム教への復帰は無理でありながら、最低限、漢族との境界を維持しようとする努力もはっきりと見える。

3 福建省南部回族文化の現状

現在、泉州回族は他の地域の回族と異なり、ほとんどはイスラム教を信じていない。福建省イスラム教協会会長の黄秋潤(76歳)によると、泉州地域では、700-800人のムスリムしかいないという。確かに陳埭丁氏と百崎郭氏の両大回族集落の計35000人の回族村民はほとんどムスリムではないと言える。泉州市の清浄寺は、もっともイスラム教を守っているモスクであり、青海省からの阿訇(アーホン)が一名駐在し、毎日イスラム教の礼拝を行う。しかし、金曜日(ジューマ)の礼拝にしても参加者はわずか30-40人であり、しかも、参加者のうち、西北部からの出稼ぎに来たムスリムが多い。毎年、開齋節(断食開け)、古爾邦節(クルバーン祭、犠牲祭)、聖記などの三大節日には、およそ100-200人が参加する。

陳埭丁氏回族集落では、1980年代まで、丁氏宗祠での祖先祭祀を行う際に、豚肉と豚油の使用を禁止する風習が存在していた。他の風習にはイスラムと関わるものがほとんど見られない。改革開放の政策実施以後、少数民族を優遇する政策を実施し、少数民族の意識が強化されてきた。1979年、陳埭丁氏回族の民族身分は晋江市政府によって再確認され、1984年、陳埭鎮回族事務委員会は県政府からの許可を得て設立された。1985年、「陳埭丁氏回族歴史陳列館」が丁氏宗祠に設立された。1990年代に入ると、アラビア風格のモスクが丁氏宗祠の隣に建てられた。1991年、丁氏回族を中心に構成する「晋江市伊斯蘭教協会」は陳埭丁氏宗祠において成立した。陳埭鎮回族事務委員会は西北部からアーホンを招き、イスラム教の礼拝を再開するようになった。また、シリア、マレーシアなどのイスラム諸国に留学生を派遣し、海外のムスリム国家からの訪問団を受け入れ、回族などの国内ムスリム同士との交流を強化し、イスラム文化の復興に力を入れてきた。1997年「陳埭丁氏回族宗譜」を

出版した。近年、泉州イスラム聖墓にある霊山の隣にイスラム風格の巨大な陳埭回族霊園が造られた(写真2)。しかし、村人の日常生活にはイスラム伝統の復興がほとんど見られない。現在、ジューマの日にしてもモスクで礼拝する人数は多くとも10-20人とどまっている。



写真2 陳埭回族霊園の一部

百崎郭氏回族集落では、陳埭回族よりイスラムの風習が多少残っている。「生者既背離祖教、死者当復歸清真」といったように、葬式や祖先祭祀において、イスラム伝統にこだわるものが多少見られる。例えば、葬式や祖先祭祀の時、豚肉を厳しく禁止する。死者は2日以内に埋葬し、吉日を選択する必要がない。また、僧侶や道士にかわり、葬列の先頭に死者の親族は『コーラン』を捧げ、行列を導く。葬式当日、7日目、14日目、49日目、100日目の儀礼にも豚肉を禁止する。伝説では、祖先祭祀や葬儀を行う時、豚肉を食べると病気になることがある、と伝えている。祖先祭祀の時、参加者は白帽子を被る。また、『コーラン』のパワーを信じている村人が多い。老人はよく『『コーラン』を読むと、豚がすぐ倒れる』という俗信を教えてくれる。

現在、百崎郭氏回族集落ではイスラムの伝統は上述した程度のものしか残っておらず、村人は日常の食生活から年中行事、通過儀礼は周囲の漢族とほとんど変わらなくなってきている。宗教面において、漢族の仏教や道教を信奉し、閩南の民間信仰の神を祭る廟が多く存在し、また、キリスト教の教会も一軒あり、县城の牧師がよく来て、礼拝と宣教をしている。ところが、最後のモスクは民国時代に壊された後、未だに再建されていない。百崎最後のアーホンは1937年亡くなってから、アラビア語の『コーラン』を読める人がいなくなった。現時点では、新しいアーホンを育て、モスクを再建し、イスラム教を再興する計画が立てられていないという。実際には、郭一族の長老さえも百崎でイスラム教を回復させることは無理であることを認めている。

今では、約200年前に族譜に入れた「開列禁条以訓誥后嗣」と「開列祀先人所不用之品乎」と「開列喪制宜戒条項」に規定された禁止条例に、郭氏一族はほとんど従っていない。例えば、「開列喪制宜戒条項」の禁止内容は現在、多くは「解禁」され、普通の風習内容になってきた。筆者は郭氏回族の墓地で二次葬の現象を多く目撃した(写真3)。死者は木造の棺に入れられて埋葬されるが、約10年後、死者の骨を棺から取り出し骨壺に入れる。骨壺に入れられた遺骨は、風水の良い墓地に改めて

埋葬される。これが二次葬である。また、葬式には、紙銭や楽隊の使用が不可欠な内容になっている。



写真3 二次葬のために廃棄された木棺と新築された墓

すでに述べたように、百崎と陳埭回族は早くから祠堂を建て、族譜を編纂した。長い歴史の中で、宗族組織が発達してきた。百崎では、郭氏家廟は全宗族の祖先祭祀の場であり、宗族下位の分節である房族では、祖厝という祖先祭祀の場があり、そこで各房族の祖先の位牌を供養している。現在、百崎郭氏宗族では、100棟近い祖厝がある。これは宗族の発達を示している。郭氏家廟と祖厝の役割は漢族と同じである(潘 2002:118-130)。家廟は宗族の始祖などの位牌しか供養しない。百崎郭氏家廟では13の位牌を供養している(写真4)。それは13の自然村の始祖の位牌である。家廟は管理小組があり、各房族の長老から構成されている。管理小組は主に宗族の祖先祭祀や宗族事務を管理する。家廟での祖先祭祀は清明節の前に行い、参加者は100名を超え、各房族の長老と村幹部、中・小学校の校長、知識人を含んでいる。家廟の祖先祭祀は各房族によって順番に主催される。長房は最初の一年目に行くと、二房と五房(人数が少ない。わずか数世帯)は二年目に行い、三年目は三房と四房が行う。祖先祭祀の費用は一族の企業家からの寄付で賄われることが多い。祖先祭祀の儀礼は次のようである。

1. 開大門(家廟の門を開くこと)
2. 奏大樂(太鼓を使う音楽の演奏)
3. 東西班(二列の司祭が入ること)
4. 引祭(祭祀を開始すること)
5. 読祭文(祭祀文を読むこと)
6. 進貢品(9種類の供え物を捧げること。但し、豚肉を含めない)
7. 整羊(お供えの一匹の羊)
8. 三鞠躬(三回の敬礼)
9. 喫祖羹(宴会)

盛大な家廟での祖先祭祀は、閩南漢族とほぼ一致するように見える(潘 2002:185-192)。これに

よって福建南部農村の回族社会では儒教思想が深く浸透し、宗族組織が発達していることがよくわかる。



写真4 百崎郭氏家廟の祖龕

ところが、1980年代から、百崎回族のエリートには懸命に民族文化を回復させるような動きもよく見られる。百崎の村落に入ると、イスラム風の新築建造物がよく目に入る。とくに、行政や学校などの公的な新造の建物はイスラム建築の特色を意識的に取り入れて建てられたものが多い。例えば、百崎回族郷の中心部にある「百崎回族郷人民政府」のオフィスビルや「白奇村委会」などの村落の役所、また、「百奇民族中学」の校舎は皆イスラム風の屋根や壁で飾っている。これらには、地元の行政は回族の民族色を強め、周囲の漢族と差別化を明確にする思惑が見られる。行政側のこうした思惑は、政府の少数民族への優遇政策を最大限に利用したいという考えが働いたと考えられる¹⁰⁾。当初は政府の主導によって民族文化の表象が多く作られたことがわかる。

近年、公的建築で見られるイスラム風格のデザイン造りは、民間にも少ないながらも影響を与えるようになった。つまり、民族の文化表象作りの動きが民間にも広がっている。最も典型的な事例は、再建した祖先霊園のデザインに、イスラム建築の風格を多く取り入れたことである。二世祖から五世祖の墓が13基も並んでいる「仕源陵園」と呼ばれる霊園では、1993年に県の文化財として認定された後、村人は墓地を囲むイスラム風の壁を造り、記念碑を建てた。また、最新の事例は、2004年に工事を終えた「仕初公陵園」である。2004年に他村から移し、再建した「仕初公陵園」は百崎回族始祖の長男郭仕初の墓苑である。もともと、郭仕初(1371-1449年)の墓は、田吟村の山陽にあり、「花崗岩塔式回壙墓(花崗岩の塔式の回族墓穴)」であった。その墓は漢族の風水観念によって、「猫狸洗」と呼ばれる良い風水穴を選んで建てられた。建ててから500余年後の1965年初、何者かによって破壊されたので、村人は祖墓を慌てて白奇村に移した。2000年代に入ってから、村落の老人会は立派な霊園を造るよう内外の宗親に呼びかけ、「仕初公陵寝遷建理事会(霊園移転再建理事会)」を組織し、募金を行い、設計から工事までに関与した。2003年の春から約一年間にわたって、大きな敷地を持つ立派な霊園が落成した¹¹⁾。この回族村落においても他の福建南部農村と同様、老人会は宗族の再興や伝統文化の復興には最も大きな役割を果たしていた(潘 2001)。

「仕初公陵园」は園門、塀、墓、亭、井戸から構成される。墓造りの考えから、工事の方法、さらに墓の構造まで周囲の漢族と一致している。しかし、墓体および関連建築にはイスラム風のデザインを多く取り入れて設計した。まず、霊園再建の思惑は漢族の儒教の「孝道」や祖先崇拜観念による部分が多い。例えば、「仕初公陵寢遷建記」¹²⁾に記したように、祖先の墓を修復しなければ、「每逢清明節祭掃、觸目一杯円丘孤塚、荊棘齊腰、荒草及膝、難免心傷、赧顔默思、不孝愧对先靈、忝為裔孫、職咎油然而生」という。雑草が蔓延り、荒廃した祖先の墓に対して、子孫としては、先祖への不孝や慙愧の念を抱えていることがはっきり表れている。また、新しい墓地の選択と着工日は漢族と同じように、風水先生に頼んで決めてもらった。これについて、「仕初公陵寢遷建記」は「堪輿ト地於原址西側、擇吉三月十六日未時破土興土」と詳細に記した。この「遷建記」の最後は、次のように締め括られている。霊園を再建したことは、「積善天佑、福地寿蔵；千秋永固、長發其祥；鴻庥裔胃、裨熾裨昌；祖澤垂蔭、是禱是頌」と記し、先祖の加護による一族の更なる繁栄を願っている。また、仕初公霊園正門内の左右二つの壁には、この「遷建記」の隣に、「仕初公派下各支世系」といった13世までの系譜図が詳細に刻まれている。もう一つの壁には「仕初公陵寢遷建理事会成員」の名簿と「仕初公陵寢遷建捐資芳名」(寄付金の金額の記入)が刻まれている。こうした祖先と一族の系譜関係を明示し、宗族の団結を強めようとするやり方は周辺の漢族にもよく見られる。



写真5 風水原理に基づいて新造した百崎回族の祖先墓

墓の構造は福建南部農村によくある半円形の「交椅墳」であり、白い花崗岩で造られた。このような墓は後高前低馬蹄形の塀が、「交椅」という肘付きの椅子に似ている(写真5)。地元の漢族ではこのような墓のほうが「風水を蓄える」との定評がある(何 2000:188-191)。仕初公の墓には、巨大な塀である「外走山」と「墓手」があり、それらは墓の「靠山」と「左右砂」即ち「青龍白虎」の働きをする。墓の前方中心部に「乾池」と呼ばれる構造を設け、池を象徴する。「乾池」周囲の低い塀は案山を意味する。「靠山」と「左右砂」は墓穴から湧き出る生気を取り込み、生気を前方へ流れさせる。「池」と「案山」は生気の流れを緩やかにさせる働きがある。この形状は「風水宝地」に求められる要素がきちんと揃っている。また、墓穴の真正面に龍の彫刻があり、両側の「墓手」に印鑑(権

力の象徴)、筆(知識の象徴)などがあるように、一族の出世を漢民族と同様、強く願っている。さらに、「墓手」に四組の「対聯(対句)」が刻まれる。対聯の内容は祖墓が「龍脈」にあり、先祖の加護と子孫の幸せを叶えるようなものが多い。例えば、「蔭層孫有翼、啓介福無疆」、「地脈連竜脈、民風統祖風」、「風清月白鐘天瑞、水秀山奇卜地興」などがある。一方、「月朗星輝天方傳聖教、山清水浄地脈發靈光」のような祖先のルーツを強く暗示するものもある。上述したように、墓の構造は厳格な風水原理に基づいて造られ、求められているものは祖先からの加護および一族の繁栄と団結であり、いかに漢族的かがわかる。



写真6 百崎郭氏回族「仕初公陵园」の大門

しかし、興味深いのは、漢族の風水思想と祖先崇拜の観念に基づいて造られた「漢族的」「仕初公陵园」には、イスラムの文化表象で「包装」した部分も多く存在している。まず、霊園の大門上方に中国語とアラビア語で「仕初公陵园」が刻まれ、その裏側には、同様に中国語とアラビア語で「回向清真」が刻まれた。大門の造型もイスラム風のデザインが見られる(写真6)。大門の両側の柱に漢字の対聯が刻まれている。その内容は「五星昆弟聯輝明代開基尊嫡長、千載子孫恒頭天方立教守清真」、その意味は「明の時代先祖がこの地に移住した。子孫たちは永遠にイスラムの伝統を守る」という意味あいのものである。また、霊園の庭の両側に、イスラム風の緑色の半円形の屋根を持つ亭(あずまや)がある。最もイスラム色の強いものは祖先郭仕初夫婦の二基の石棺と言える。石棺の両側にはアラビア語しか刻まれていない。また、墓の後扉にもアラビア語の「コーラン」が刻まれている。実際には、ここの石棺は泉州地域に残っている古代ムスリムの石棺を模倣して造られたのである。

百崎回族祖先の霊園の再建およびその構造を見ると、福建省南部の回族村落では、民族のエリートたちは、漢文化から受容した祖先崇拜を利用し、墓をモニュメントとすることで、自分たちの祖先に対しての追憶をすることにより祖先の回族背景への「記憶」をよみがえらせ、回族の伝統文化の衰弱とそれに伴う民族意識の弱体化を食い止め、アイデンティティの維持ないし強化を図ろうとしていることがうかがえる。

4 まとめ

海のシルクロードにより発祥してきた福建南部農村の回族社会では、現在、イスラム教はほとんど無くなり、生活風習も周辺の漢族と一致しているように見える。また、1980年代からの民族エリートにより伝統復興運動は文化表象の創出にとどまっておらず、庶民の日常生活には大きな影響を与えていない。こうした回族はムスリムではないにもかかわらず、彼らは強い回族の意識を持ち、民族の文化表象を強化し、漢族との境界への固定化ないし拡大に努力している。

一方、この地域の回族エリートはよく自分の社会や文化の特色を意識して、民族と宗教との関係を区別して考えている。彼らは、われわれがイスラム教を放棄しても回族という民族身分は変わりなく、回族にとってはイスラム教への信仰が不可欠な要件ではない。回族はそもそも漢族と融合して構成された民族なので、今日では飲食面までイスラム伝統にこだわるのが時代遅れであり、社会・経済発展が停滞した結果だと主張している。確かに、彼らの意識の中では自分たちが他の地域の回族と異なり、経済や文化面において進んできた福建回族であり、また、福建回族としての誇りやアイデンティティを強く持っているように見える。

上述の分析をまとめ、次のような観点を提出できると考える。福建省南部地域の回族村落社会は、古くからこの地域で高度発達した儒教文化からの影響を強く受けて、祖先崇拜の風習を広く受け入れた。その上で、始祖を始めとする祖先への祭祀がよく行われ、アラビア・ペルシア系祖先とその歴史上の栄光を深く記憶している。さらに、改革開放からの少数民族優遇政策の強化や、アラビア世界情報の溢れなどの外部環境からの影響も加わって、結果としてはわれわれのルーツが漢族と同じではなく、もともと異なる民族であるという意識とアイデンティティが膨らんできたのである。そこで現行の中国民族分類の枠組において回族と結びつき、ほとんど消失した回族の「文化伝統」を意識的に回復させ、文化表象を多く創出することになった。つまり、福建南部農村の回族が民族アイデンティティを維持し強化することができた最も重要な原因の一つは、遠い昔から受容し、現在深く浸透している漢族の祖先崇拜を実践してきたから、であったと考えられる。

本研究における今後の課題として、福建省南部農村の回族村落社会は漢文化の祖先崇拜の受容実態、祖先崇拜と回族アイデンティティの維持形態の関係について、さらなる実証的研究を行う必要がある、と考えている。さらに、東南中国の各地において、「西北ラーメン」などの「清真料理」の流行が示しているように、大量のイスラム教徒が東南中国へ出稼ぎに来たために、地元の回族社会および文化変容に対して彼らを与えた影響もさらに研究する必要があると考えている。

参考文献

- 郭志超 2003「泉州白奇回族伊斯蘭式墓型的變遷」、中国航海学会他編『泉州港與海上糸綫之路』、北京：中国社会科学出版社、pp514-527。
- 何 彬 2000「祖先の憩いの場所と風水(福建・浙江)」、聶莉莉他編『大地は生きている：中国風水の思想と実践』、東京：てらいんく、pp 179-191。
- 黄秋潤 2004「略論泉州伊斯蘭教的伝入和盛衰」、許在全編『泉州文史研究』、北京：中国社会科学出版社、pp102-117。
- 呉幼雄 2004「古代泉州外来宗教史略」、許在全編『泉州文史研究』、北京：中国社会科学出版社、pp80-101。
- 佐々木信彰 2001『現代中国の民族と経済』、京都：世界思想社。
- 庄景輝 1997「時代変化と対策：陳隸丁氏回族の“漢化”過程に関する一考察」、末成道男編『東アジアの現在—人類学的研究の試み』、東京：風響社、pp164-166。
- 陳支平 1991『近500年来福建の家族社会與文化』、上海：三聯書店。
- 西澤治彦 1999「回族の民間宗教知識—漢語小冊子に説かれたイスラム教」、末成道男編『中原と周辺—人類学

的フィールドからの視点』、東京：風響社、pp313-329。

潘宏立 2005「中国東南沿海部の回族およびその文化変容—福建省南部回族村落における現地調査を中心に」、山路勝彦編『中国少数民族のエスニック・アイデンティティの人類学的研究』、関西学院大学社会学部、pp 56-68。

潘宏立 2002『現代東南中国の漢族社会—閩南農村の宗族組織とその変容』、東京：風響社。

潘宏立 2001「中国福建省における宗族の再興：閩南地域の老人会を中心に」、横山廣子編『中国における民族文化の動態と国家をめぐる人類学的研究』、『国立民族学博物館調査報告 20』、国立民族博物館、pp 385-403。

百奇郭氏回族宗譜編委会 2000『百奇郭氏回族宗譜』(上、中、下)

注

- 1) 『中国統計年鑑 2002 年版』によると、2000 年では、中国全国回族的人口は 9816805 であり、壮族、満族の次三番目の大きな少数民族である。『福建年鑑 2004 年版』によると、福建の少数民族は約 58 万で、福建人口の 1.71% を占め、そのうち、回族人口 109800 人で、省内二番目の大きな少数民族である。中国東南部に位置する江蘇省、上海市、浙江省、福建省、広東省において、福建省の回族的人口数が最も多く、その人口の比率も最も高い。
- 2) 筆者は文部科学省平成 14 年度-16 年度科学研究費補助金(基盤研究×1)「中国少数民族のエスニック・アイデンティティの人類学的研究」(研究代表者・山路勝彦教授)の研究分担者として、現在における中国東南沿海部の回族的社会や文化を現地調査・研究するチャンスを得た。ここでは、研究代表者をはじめ研究メンバーの諸先生および現地調査の際にご協力いただいた関係者各位に心からお礼を申し上げます。
- 3) 本文は筆者が文部科学省 14 年度-16 年度科学研究費補助金(基盤研究×1)「中国少数民族のエスニック・アイデンティティの人類学的研究」に提出した報告に加筆したものである(潘 2005)。
- 4) 晋江陳埭と惠安百崎の回族は、歴史上、各地に移住しており、現在各地に多く散在している。例えば、惠安百崎から県内の塗寨郷下郭村、黄塘郷前郭村、許田村に移住し、その人口総数は 3000 人を超えている。また、浙江省の蒼南県、温嶺市、台湾省の鹿港、東南アジアに移住した人数も少なくない。台湾鹿港だけでは 500 世帯を超えている。各地の郭氏宗親は百崎で祖先祭祀を行い、連携関係を保っている。
- 5) 泉州清浄寺は 1009 年に始めて建てられ、1310 年に泉州在住のペルシア(今のイラン)のムスリムによって再建された古代アラビア風格のモスクである。1961 年 3 月、国の重要文化財として国務院によって指定された。現在、福建省イスラム教協会はこのモスクでイスラム教の礼拝を含む宗教活動を行い、福建省におけるイスラム教存続の象徴となっているところもある。
- 6) この「賜食猪肉」の伝説によると、十一世「明賜進士通議大夫刑部左侍郎贈尚書」である丁啓濬(1569-1636 年)は、明朝の中央官僚になり、豚肉を食べないことを奸臣魏忠賢により「欺君之罪」として皇帝に誣告された。皇帝はそれを調べ、丁啓濬が「祖先から豚肉を食べないという教えがあるので、食べると、祖先を裏切ることになり、食べないと、皇帝を軽視する罪になるが、どうすれば良いのでしょうか」と率直に告白した。皇帝は丁啓濬の潔白と人柄の良さに感心して、丁一族に豚肉を食べるように命じたのである。その時から丁一族は豚肉を食べようになった。この伝説は、今も豚肉を食べる原因として丁一族からよく言われている。
- 7) 陳埭では、「丁氏宗祠」が回字形の構造を持つことは、祖先が「回回」という事実を子孫たちに伝えたいため、意識して設計したという言い伝えがよく聞ける。
- 8) 百崎に定住した原因について、風水説の言い伝えがある。郭仲遠がアヒルを放し飼いにするため、よく百崎に来る。不思議なのは、アヒルはここで毎日、必ず二つの卵か二つの黄身の卵を産む。風水先生からここが絶好の風水地だと教えてもらって、移り住むことを決断したという。興味深いのは、移住原因説も漢

族からの影響が見られることである。隣の石獅市の容卿村の漢族も似ている伝説がある(潘 2002:39)。

- 9) 明の中期頃まで庶民の家廟建設に関する制限があったとされる。官僚を輩出する宗族しか祠堂を家廟として建てられない(潘 2002:120)。
- 10) 漢民族が集中する地域において、政府は少数民族への財政支援から産児制限の緩和、就学や就職の優遇まで多くの面で優遇政策を実施している。例えば、「百奇民族中学」の校舎は政府からの少数民族支援の特別経費を受けて建てられた。
- 11) 霊園に建てられた壁に書かれている「仕初公陵寢遷建記」では詳細な記述がある。
- 12) 「仕初公陵寢遷建記」は仕初公霊園の内壁に刻まれている。全文は五つの段落から構成し、黒い大理石に繁体字の隸書の金字で書かれている。その内容は先祖の家族構成、業績への賛美、墓の場所と方位、再建の原因と経過、先祖の加護への期待などを含む。署名は「仕初公陵寢遷建理事会」である。

Cultural Transformation and Ancestor Worship of the Hui Community in China's Southeastern Coast A Case Study of the Hui Villages in Southern Fujian Province

Hongli PAN

In China's southeastern coast where the Han people are the largest population, there is a Hui community originated mainly from the Arab-Persian traders who arrived there during the Tang and Song Dynasty by the Sea Silk Road, which is different from the Hui Community in the northwestern hinterland areas of China. The Hui Community in Southeastern China, though not large in population, has always had close contacts with their neighboring Han people. Their culture is therefore deeply influenced by the Han culture, thus displaying some characteristics of synthesis between the two cultures.

By investigating the two largest Hui villages in Southern Fujian Province and basing my research on historic records, this article examines the formation and development of the Hui Community in the Southeastern Coast of China and analyses the course of its cultural transformation in relation to social factors. It will then further discuss the transformation of the Islamic culture of the local Hui community, the merger between the Han and Hui cultures and the revival of Hui traditional culture in recent years, which is mainly based on my ethnographical investigations in the field. I argue that the Hui community in this area has long accepted the Han concept of ancestor worship and always attaches great importance to the practice of ancestor worship. Their remembrance of the Arab-Persian ancestors, intensified consciously or sub-consciously since the 1980's when China has implemented its policies on ethnic minorities, forms the most important foundation of their ethnic identification, which results in the increase of the Islamic styled constructions in the Hui villages in recent years.